

P1-007

自閉スペクトラム症幼児をもつ母親を対象とした子育てプログラムの効果

島田 明子¹、成田 泉²、大井 ひかる³、
水内 豊和⁴

¹富山県立しりとり支援学校

²平谷こども発達クリニック

³富山県立黒部学園

⁴富山大学人間発達科学部

【目的】

自閉スペクトラム症幼児の母親を対象に、従来のペアレント・トレーニング (PT) のような養育スキルに加えて、女性自身の「個としての自分」と「母親としての自分」の葛藤から統合までの過程を支援することをねらいとする小集団の子育てプログラムを実施し、参加者の女性のアイデンティティの様態による効果について検討する。

【方法】

保育所に通う自閉スペクトラム症幼児を持つ母親5名を対象に、『ほめる』でおわる！子育て教室」という名称で、X年10月～X年12月まで、保育所内において、平日の午後に隔週1回120分の子育てプログラムを6回実施した。その際、参加者の女性のアイデンティティの様態を「個としての自分」と「母親としての自分」の確立度の違いから統合型、独立母親型、伝統母親型、未熟型の4タイプに分け、育児不安やストレス軽減、さらには子どもの行動変容にどのように影響するのかについて、プログラム前・後、2ヶ月後の時点で検討した。なお、プログラムへの参加文書による説明の上同意を得ている。また各評価への回答は、無記名とし任意とした。

【結果】

参加した母親の育児ストレスは低減し、子どもの問題行動は減少、発達指数は向上した。参加者のアイデンティティのタイプごとに得られた効果については、全般的にプログラムを受けたことでそれぞれにプラスの変容がみられたが、その効果はタイプごとに質的に異なっていた。

【考察】

いわゆるPTである「母親としての自分」支援の内容は、発達障害のある子どもの養育技術の習得に特化しており、支援者としての役割を遂行することを強く求められる。しかしそれは、時には大きな負担となるであろう。したがってこの時期、保育所・幼稚園、保健センター、療育施設、医療機関など、子どもとその家族に携わる支援者は、子どもに支援を行う母親とその家族もまた、支援を必要とする存在であるという意識をもつことが重要であると考えられる。その上で、本プログラムの内容が従来の「母親としての自分」支援内容 (PT の内容) だけでなく、「個としての自分」支援内容をプラスしたことは妥当であり、また必要であったことに加え、有効であったと考える。

P1-008

在宅で医療的ケアが必要な子どもを育てる母親の支援と育児ストレス－「ママの会」の取り組みと育児ストレス調査－

宮崎 つた子¹、木村 めぐみ¹、仲野 里美²、
高村 純子²、村田 博昭²

¹三重県立看護大学看護学部 看護学科

²独立行政法人国立病院機構三重病院

【目的】

近年、医療的ケアを継続しながら在宅で生活する子どもたち (以下医療的ケア児) が増加しているが、その課題として、「同じ境遇の親同士の交流の機会がない」、「訪問教育、看護等の利用で外出の機会がない」などが言われている。本研究では、医療的ケア児を育てる母親の会を開催し、その前後の育児ストレスの変化を明らかにした。

【方法】

A病院の協力で平成29年度に医療的ケア児を育てる「ママの会」を2回開催した。参加対象者は、医療的ケア児の母親、かかりつけ医にはこだわらないとした。調査は、平成29年5月24日と8月24日である。調査方法は、会の前後で育児ストレスの質問紙調査 (日本語版PSI-SF) と参加後の聞き取りを行った。倫理的配慮は、研究内容を紙面と口頭で説明し同意を得た。なお、本研究は協力病院の倫理審査会の承認を得て実施した。

【結果】

対象者は第1回6名、第2回9名であった。母親の年齢は第1回34.0 (±4.3) 歳、第2回35.9 (±5.7) 歳であった。PSI-SFの平均得点は、総点が第1回参加前49.33、参加後48.17、第2回参加前42.00、参加後41.00であった。下位尺度の子どもの側面の平均得点は、第1回参加前22.00、参加後22.33、第2回参加前19.67、参加後19.11であった。親の側面の平均得点は、第1回参加前27.33、参加後25.83、第2回参加前22.33、参加後21.89で、2回とも「私は物事をうまく扱えないと感じることが多い。」、「子どもが生まれてから、私はやりたいことがほとんどできないと感じている。」の項目が下がっていた。参加者の感想は、主に「つながり」、「自信」、「情報交換」に関する内容であった。「つながり」では、「元気をもらって励まされた」、「自分同様この場を求めるママの多さに驚いた」などであった。「自信」では、「自分も会の運営を手伝いたい」、「病院なので、慣れない外出でもトライできた」、「情報交換」では、「レスパイトなど福祉サービス」、「子どもの病状や医療的ケアの手法」、「学校や保育園」、「経済面」などであった。

【考察】

医療的ケア児を育てる母親は、「医療機関」という安心して集まれる「交流や情報共有の場」を必要としていた。また、企画の段階から能動的に参加し、運営することで、自己効力感の向上に繋がると考えられる。育児ストレス得点からは、全体に総点は高いが、「ママの会」の開催によって、下位尺度の「親の側面」の得点が下がる可能性が示唆された。